

第25回 熊本県国保地域医療学会参加報告

検査科 有住将尚 臨床検査技師

2021年11月23日に第25回熊本県国保地域医療学会が開催されました。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、2年ぶりの開催となりました。とはいえ、例年通りの開催ではなく、WEBを用いたオンライン学会となりました。

この学会は、多職種が連携を強化することで、超高齢化社会に対する地域包括医療・ケアの充実強化と地域包括ケアシステムの構築の強化に努めることを目的としております。「WITH コロナ時代の地域医療」を今回のメインテーマと掲げ、地域医療に関することはもちろん、連携・介護・災害・臨床に関することを加えて、今年は新型コロナに関する演題も募集され、熊本県下の医療施設等から合計36演題が発表されました。

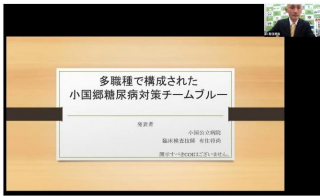
その36演題の内、当院からは片岡恵一郎事業管理者・寺倉宏嗣医師・水橋由美子医師・松田圭史医師・室原理恵看護師、そして私、有住将尚臨床検査技師の6名が研究発表をしました。なお、片岡事業管理者は座長としても参加しております。

当院からの発表は、全体の1/6に該当し、当院の地域医療へ積極的な取り組みの表れといえます。

また、片岡事業管理者と松田医師の2演題が優秀賞を受賞しました。発表内容は以下を御参照下さい。

『小国郷での糖尿病治療中断及び未治療者対策 ～多職種で構成されたチームでの活動について～』

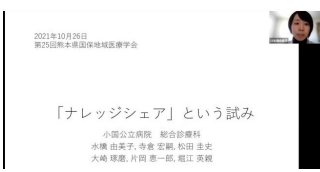
(臨床検査技師：有住将尚)



私は、小国郷の多施設・多職種のメンバーで構成されている「小国郷糖尿病対策チームブルー」のコロナ前と後の糖尿病対策活動及び中断者数の改善について発表しました。

『ナレッジシェアという試み』

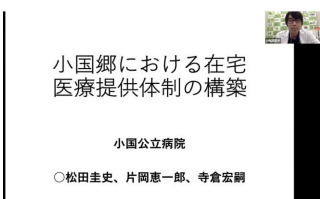
(医師：水橋由美子)



小国郷の医療に従事するにあたり多様なアプローチのできる、総合医としての学びは重要である。小国公立病院では2021年より、全人的な視点を効率的に学ぶ取り組みとして、「ナレッジシェア」を始めたため紹介した。

『小国郷における在宅医療提供体制の構築』

(医師：松田圭史)



小国郷では2018年に在宅医療サポートセンターが設立され、その中の大きな取り組みの一つとして24時間看取りシステムを構築しました。これからさらに在宅医療体制を充実できるように取り組んでいきます。(優秀賞)

『「コロナ禍を小国郷で乗り越える。」 ～オンライン住民フォーラムを開催して～』

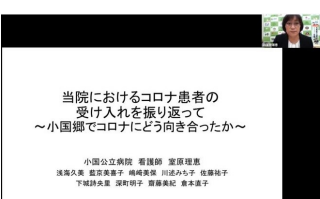
(医師：片岡恵一郎)



春に行った住民フォーラム、『コロナ禍を小国郷で乗り越える～あなたも私も取り残さない未来のまちづくり～』にて、痴呆の医療・ケアのあり方と未来のまちづくりについて、多世代の多様な住民と考えた事、そしてその効果について発表した。(優秀賞)

『当院におけるコロナ患者の受け入れを振り返って 小国郷はコロナにどう向き合ったか～』

(看護師：室原理恵)



新型コロナウイルス感染症が流行し、小国郷でも陽性患者様を速やかに受け入れできるように、万全な感染対策で受入れを行った事について、今回国保学会で発表しました。1日も早く通常の生活に戻れるよう、今後とも皆様のご協力をよろしくお願い致します。

『コロナ禍におけるターミナルケア』

(医師：寺倉宏嗣)



コロナ禍で在宅看取りを希望された5人の患者さんの看取りを行った。コロナ禍で入院中の面会は制限されており、緩和医療を含め、在宅診療を行うことで、在宅で過ごされた時間が長く、患者さん本人も家族も満足されたように感じた。

ゆたあ〜と

堀江院長が表彰されました

このたび、小国公立病院 院長 堀江英親先生が、『公益社団法人 全国国民健康保険診療施設協議会会長表彰』を受けられました。

堀江先生は、平成9年から現在まで永年、小国公立病院医師として、この間外科部長、副院長を歴任し、病院の運営に大きく寄与してきたことによる表彰です。

地域の中核医療機関として、医療はもとより、行政などと連携し、地域の保健、介護、福祉の中心として活動している当院で、常にその活動の中核として業務に精励し、文字通り包括的地域医療を担い、小国郷住人のために多大な貢献をしております。

病院では、感染症対策部門のリーダーとして、院内の感染対策を、適正確実に推進しています。

また、クリニカルパスの策定、導入推進にもリーダーとして積極的に取り組まれており、各医師の技術の向上目標や改善点、考え方の標準化や情報の共有化がなされることで、より効率の良い安全な検査や治療の提供に尽力し、当院の医療水準の向上に貢献しています。さらに、近年の医師不足、看護師不足は喫緊の課題であり、充足に向けて積極的に活動し、病院組織体制の充実にも多大の貢献を行っております。

(総務係長 六井淳二)

発行
小国公立病院
0967-46-3111
おぐに老人保健施設
0967-46-6111
訪問看護ステーション
0967-46-6050

48号
令和3年12月

小国公立病院
HPアドレス
<http://www.ogunihp.or.jp/bind/>



全国国民健康保険 診療施設協議会 から表彰を受けて。

小国公立病院 院長
堀江 英親

全国国民健康保険診療施設協議会(国診協)とは、国民健康保険診療施設を会員として、公益社団法人として活動している組織です。

地域住民の保健、医療の向上を目指し、「地域包括ケアシステム」の構築を推進することを目的としています。(ホームページの記載から)当院も、地域包括医療・ケア認定施設です。(令和3年6月時点で全国217施設ある)

この度はからずも、上記表彰を頂き驚いています。選考基準などは、分かりませんが、頂いたからには、改めて、役割を認識し、地域住民の安心が得られるよう仕事に専念したいと思っております。

私は、平成9年から、坂本英世前院長にご指導いただきながら、小国公立病院に勤めて現在に至っています。

普段から、目の前の患者にとって、より良い診療は何かを考えています。最近では、ガイドラインなどが充実してきましたが、同じ病気でも同じ経過を辿るわけではありません。患者自身の個性、個性、考え方もそれぞれ違います。悩ましいことも多々あります。また各個人の家族環境、周囲の支援、社会の充実度も変遷することがあります。

病気を理解し如何に治すか、というだけでなく、その周囲のケアも大事です。当病院組合では、職員全体でその実践を行っていていると思っております。

今回の受賞も、当院の職員皆さんのそういう働きがあり、私がお賞ささせていただきましたものと思います。これからも、職員とともに患者に寄り添った治療やケアを目指します。



※ 訂正 前号(ゆたあ〜と新聞 47号)「検査室からお知らせ～ALP 基準範囲の変更についてお知らせ」の一部訂正をいたします。

(新) ALP_JSCC:38~113 U/L→(新) ALP_IFCC:38~113 U/L

シリーズ 柴三郎先生の薫り ④

「細菌学の父」から「近代日本医学の父」へ

(病院事業管理者 片岡恵一郎)

前回までで、柴三郎先生が破傷風菌とペスト菌という人類にとって重大な細菌を2つも発見したということがどんなに人間離れた偉業なのかを解説し、細菌学の父と言われるゆえんをお伝えしたところでした。

今回は細菌学のみにとどまらず、柴三郎先生が日本医学界で務められた大きな役割を紹介し、令和になってもなお高く評価され続ける柴三郎先生の医療業界への功績についてお話ししたいと思います。

結核菌を発見したロベルト・コッホの研究で結核の研究もしていた柴三郎先生は、日本に戻ってきてから1893年に「土筆ヶ丘養生園」という名前の日本で初めての結核療養所を東京に作り直しました。



当時の「土筆ヶ丘養生園」

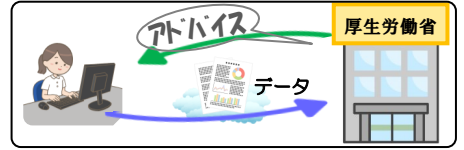
当時、結核は「国民病」「亡国病」と恐れられており、日本にとって重大な感染症でした。

介護報酬支援システム『LIFE(ライフ)』のご紹介



2021年4月より介護の新しい情報システム『LIFE』がはじまりました。

『LIFE (Long-term care Information system For Evidence)』とは「科学的介護情報システム」という意味です。これは、介護施設事業所で行っているケアの内容、計画や利用者の状態などをインターネット上の公式サイトから一定の様式で入力して、厚生労働省に提出すると、厚生労働省でそれが分析されてフィードバックされるという仕組みです。介護施設・事業所では、これを活用してケアの質の向上に取り組むことができます。



当施設も今年10月より「LIFE」を導入しました。導入した事で、利用者様の利用負担が少し増えましたが、LIFEを活用する事で、根拠に基づいた、より質の高い介護が提供出来るよう、そして満足いただける施設になるよう努力していきます。(おぐに老人保健施設 相談員 宇野)

現在は検査でつかわれているツベルクリンを治療薬として使い、国をあげて結核の治療と予防に力を注ぎました。1906年には、日本で最初の医学会である日本連合医学会の会頭になられています。会頭としては2代目の会頭ですが、立ち上げの段階で副会頭として大きな影響を及ぼし、初代は田口和美を会頭に掲げ発足。満を持した形で1909年より会頭を務められました。世界に通ずるレベルに達した日本の医学を外国の力を借りることなく発信するというのは、日本近代医学の発展の過程で大きな出来事だったといえます。



現在の『北里文庫』

1915年には明治天皇の命を受け、生活困窮者支援の為の済生会病院初代院長に就任。全国に済生会の病院や施設が作られ、初めの一歩を築かれました。1917年には福沢諭吉へのご恩返しということで、慶応大学医学部の初代学長に就任されています。こんなに沢山の役職を一人でどうやってこなしておられたのか、心配になりますね。

しかしそんな中でも故郷の小国町の事を忘れておられず、同じ時期1910年に小国町に『北里文庫』を寄贈されています。そう、北里柴三郎記念館の資料館になっているあの建物です！

第一次世界大戦中に体温計が手に入らなくなったので、日本で生産できる様に柴三郎先生が発起人となり1921年に作った会社が「テルモ」で、今でもテルモの電子体温計が使われている方も多いことでしょう。1923年には日本医師会を創設し、

北里柴三郎の生涯年表

- 1853年(0歳) 1月29日 小国郷北里村に生まれる
- 1871年(18歳) 熊本医学校に入学
- 1874年(21歳) 東京医学校に入学
- 1883年(30歳) 東京医学校を卒業・内務省に入局
- 1885年(32歳) ドイツ留学
- 1889年(36歳) 破傷風菌の純粋培養に成功
- 1890年(37歳) 破傷風菌抗毒素の発見。血清療法法の確立
- 1892年(39歳) 帰国し内務省に復職・私立伝染病研究所を設立
- 1893年(40歳) 初の結核専門病院「土筆ヶ丘養生園」を設立
- 1894年(41歳) 香港に赴き、ペスト菌を発見
- 1906年(53歳) 日本連合医学会の会頭を務める
- 1914年(61歳) 『私立北里研究所』を創立
- 1915年(62歳) 恩賜財団済生会芝病院初代院長に就任
- 1916年(63歳) 小国町に『北里文庫』を寄贈
- 1917年(64歳) 慶應義塾大医学科創設、初代科長就任
- 1921年(68歳) 現「テルモ」の会社創立の発起人となる
- 1923年(70歳) 日本医師会を創設、初代会長就任
- 1931年(78歳) 6月13日 脳溢血により逝去

初代会長を務められています。日本全国の医師を統括する事ができる様になり、初代会長として、医師国家試験や国民健康保険制度を制度化する事に尽力されたそうです。日本医師会会館正面玄関には柴三郎先生の銅像が設置されています。こんなに沢山の仕事を精力的にされてきた真つ只中で、1931年突然、脳卒中で帰らぬ人となりました。享年78歳、当時はピンピンコロリという言葉はなかったかもしれませんが、予防医学の大家として、ウェルビーイングを保ち寿命を全うされたといえるでしょう。亡くなった後になりますが、1945年に医師国家試験が始まり、1958年には国民健康保険法が施行、1962年には北里大学が開設となりました。こうやって見てきますと、私達が生業としている医療業界は柴三郎先生が作られたもの、と言っても過言ではなく、近代日本医学の歴史上で柴三郎先生の業績に匹敵する人は存在しません。時代は流れ、環境は変わっていますが、柴三郎先生の築かれたものは、普遍的なものばかりで、色褪せる事はありませんし、むしろ、100年以上経った令和になって医療の方向性は柴三郎先生の目指されていた未病・予防医学の方向に向かっていきます。小国郷の地域医療が目指す方向性を、柴三郎先生が時代を越えて、私達に指し示して下さいたいという気がしてなりません。



～ 支援看護師紹介 ～



いしかわ ひろみ
石川 ひろみ

3階病棟看護師

熊本赤十字病院からまいりました。令和3年10月1日より6ヶ月間、3階病棟で勤務させて頂いております。短い期間ではありますが、少しでも地域看護に貢献できる様に頑張りたいと思っています。私生活では、小国の自然に触れ、美味しいものを堪能し、温泉巡りをしていると思っています。よろしくお願ひします。

～ 研修医師紹介 ～



いぶき たつや
似吹 達弥

医師(総合診療科)

この度10～12月の3ヶ月間勤務させて頂くこととなります熊本赤十字病院内科専攻医の似吹達弥と申します。出身は福岡県大牟田市ですが、学生時代は香川、初期研修は千葉で行っていたため、昨年より久しぶりに九州で過ごしております。短期間ではありますが、1日1日を大切に小国の医療のお役に立てるように頑張りたいと思います。ご迷惑をおかけする事もあるかと思いますが、よろしくお願ひ致します。

おいせ 職員が紹介されました

わたくしたちも働きママン!

2021年12月号「サンキュ」の『わたくしたちも働きママン!』に匿名ではありますが、当病院薬剤師に職するまでのストーリーが紹介されました。Amazon(アマゾン)や電子書籍で購入できます